
三沢高校

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三沢高校

【Nコード】

N7842F

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

三沢高校所属の高校生の織り成す、物語。

三沢高校三年、中川秀行は、容姿端麗、文武両道で、所属していた水泳部では、県大会出場という業績を残してみせた。

県大会出場。それを最後に、彼は退部した。ある日の部活のミーティングでそれを申告した時、仲間が突然の退部に驚いている中、顧問の芳田和子は、微笑みだけを浮べて、「わかりました」と秀行にただ頷いて了承した。

秀行は、窓際の席に頬杖をついて座りながら、その時のことをぼんやりと考えていた。

彼の胸には、紺のネクタイが垂れ下がり、それは、窓から吹き入る風によって揺れている。

背もたれにブレザーがかかった、彼の椅子に、ふと、背後から近づく影が落ちた。香夏子だった。

「何、ぼうっとしているの？」

香夏子は、秀行の後ろから、その正面へと迂回して、そっと彼の机の上に片手をついた。彼の顔を覗きこむように、長身を屈ませる。長い髪が、耳の上を垂直に垂れる。

「別に」

秀行は、窓の外へ視線を向けて、ぼつりとつぶやく。

「さては、テストの点数が悪かったなあ？」

香夏子は、悪戯っぽく唇を曲げてそう言うけれど、秀行は静かに首を振り、

「退部した時のことを思い出していたんだ」

そう正直に話した。

香夏子はそれを聞くと、途端に笑みを止めて、ぽりぽりと自分の頭をかき、

「もしかして、まだ退部したことを気にしてるの？　もう一年前の話じゃないの」

そう言って、壁に自身の細い背中をよりかからせた。

「ふと、思い出したただけだ。それに、部活をやった頃は、毎日が充実していたな、と思って」

「今は充実してないの？」

「してるさ、今も。けど、部活をやった時の方が楽しくもあったし、充実感も大きかった気がする」

「そんな話は良いから、とにかくテストの答案見せてよ」

突然香夏子は壁から起き上がり、秀行の机の中に、手を突っ込んだ。秀行は、自分の顎の下で、彼女の後頭部が日光に照り輝くのを、眩しそうに目を細めて見た。

彼女の髪は、セーラー服をまとったその背中の中、半ばまで達している。それに、後頭部の中心から、髪を青いゴムで、細く一まとめにして、背中に垂らしていた。その束が、彼女がもぞもぞと動く度に、背中から腰へとずれて垂れ下がる。

「あった」

彼女の頭が突然上がったので、秀行の顎にぶつかり、秀行は顎をさすりながら、正面の彼女を見る。

「さあて。どんな感じかなあ？」

彼女は、秀行の前の席の椅子に、反対の向きに腰掛け、緑色のクリアファイルから、答案用紙を抜き出した。

「国語は……百点！ あんた、どういう神経してるのよ！？」

「あまり大声で言うと、クラスの人に五月蠅いだろ。もっと小さな声で」

「ごめん。……うわ……何、この高得点の数々」

「そりゃ、勉強してるからね」

「もういいわ。見ても、あまり意味がなかった」

「なんで、見る必要があるんだ？」

「今回は、私も良い点取ってたから、もしかして秀行を追い抜いたかな、と思ってさ」

香夏子は、思ってたさ、と言うところを、どこか可笑しげに笑いな

がら言い、クリアファイルを放るように、彼の腕の中へ返した。そして、椅子から立ち上がる。

「どこ行くんだ？」

「トイレ」

彼女はすぐにそう切り返して、教室を出て行った。

秀行は、香夏子の背中が廊下へ出て行くのを見守ったが、消えた途端に、クリアファイルに視線を移した。

「明日、また予備校あるんだよね……」

そう独り言をつぶやき、彼はクリアファイルをそっと机の中に戻した。その手には、クリアファイルについていた彼女の長い髪の毛が握られていた。彼は机の中から手を引き抜くと、その髪を、ポイツと横へ放った。

髪はふわりと宙に浮き上がり、そして、偶然横を通り過ぎた女子の、ブレザーの肩にかかった。

彼は、あ、と小さくつぶやいて、彼女の背中が黒板の方へ向かうのを目で追ったが、すぐに視線を離して、顔を伏せた。

「今日は、ゲーセン寄らないのかよ？」

「金がない。また今度な」

駅前の住宅街の片隅。道が二手に分かれる箇所で、秀行は、友人の中川隆俊に、そう断った。

同じ中川姓の隆俊とは、同じクラスになった当初、席が前と後ろで隣接していた為、懇意になった。隆俊はサッカー部に所属しており、高校二年から――つまり一年間の付き合いになる。

毎日のように一緒に帰り、そしてそのほとんどの場合にゲームセンターに寄るのだが、今日は先約があったので、辞退した。

「今日は、ゲート（新作ゲーム）が入荷されるのに。……まあ良いや、俺は夜までゲーセンに居るから、暇だったら後から来いや」

「ごめん。今日は、行けそうにない」

二人は会話しながら、お互いの行く道の方向へと歩き出し、徐々

に距離が離れていく。

「なんだ、つれねえ。ま、いいや。じゃあな！」

隆俊は、手で引いていた自転車の、サドルに乗り、前を向いたまま片手を上げ、遠ざかっていった。

秀行は正面に向き直り、自分も自転車に跨って、漕ぎ出した。

昼間の住宅街の道は、眩しい日の光を浴びる、建物の影になっていて、涼しかった。その涼しい空気に、顔を撫でられながら、秀行は微笑を浮べて、漕いでいく。

ふとその時、正面からこちらへ向かって、自転車を漕いでくる学生に気付いた。遠目に見て、その女子の制服が、同じ高校のものであることに気付き、秀行はさらに目を細めて見た。

だんだんと距離が狭まり、その女子の顔が明らかになった。その途端、秀行は彼女に声をかけていた。

「宮城さん」

彼女は秀行に気付かず、正面をじっと見ていたが、秀行が声をかけると、途端にブレーキをかけて、横へ振り返った。

「あら、中川」

「ご無沙汰してます、宮城さん」

「ほんとに、ご無沙汰ね。……今から、予備校？」

「いや、これから少し図書館に寄ろうかな、と」

「あ、私も行く」

突然、彼女は自転車のハンドルをくるりと横へ傾けて、秀行の後ろを迂回して、彼の隣へと並んだ。

「突然ですね」

秀行は苦笑して、自転車をゆっくりと漕ぎ出した。

「あ、でもな。……うーん、どうしよっかな」

背後で、悩むような声を出すのが聞こえたが、すぐに彼女は自転車を漕ぎ出し、秀行の隣へと並んだ。

「行くわ」

「予備校、あるんじゃないですか？」

「あるけど、うちの予備校、授業は、DVDを見るだけだから、いつ行ってもそんなに変わらないのよね」

「うちの予備校も、授業はDVD形式ですよ。早送りしながら見れば、一時間半の授業も、その半分くらいで済む」

「あ、そっか！」

突然宮城可南子は声を上げた。

「そうやれば良いんだね。知らなかった」

「もしかして、今までずっと普通で見てたんですか？」

「うん」

宮城可南子は、秀行が水泳部に所属していた時、一緒に全国を目指して頑張った同級生だ。秀行は県大会止まりだったが、可南子は高二にも関わらず、全国までいった。けれど、今年はあまり良い成績は残せずに、高三の最後の大会が終了してしまった。可南子は、今月――九月に入ってから、予備校に通い始めたようだったが、意識はまだどこか、水泳へと向いているに違いない、と秀行は思った。

「水泳、楽しかったですか？」

突然秀行は訊いてみた。彼女の横顔を見る。可南子は、ショートヘアの茶髪を、おでこから風に逆立てながら、そっと正面を見て微笑んでいた。そして、そのまま、

「楽しかったよ」

とぼつりと、どこか機械的な口調でつぶやいた。

「悔しいですか？」

もう一度そう訊くと、今度は少し沈黙があった。

「少し悔しい気持ちも、確かに出てきたよ。けど、今は進学のことしか考えてない」

「……どこの大学目指すんですか？」

「うーん、やっぱり中川に行く大学かな？」

可南子は、にこりと笑ってこちらを向く。

「ホントはどこ目指してるんですか？」

「東京大学」

「行けるんですか？」

「わからないけど、目標は高くしておいた方が、やりがいがあるじゃないの。燃えるじゃないの」

「高すぎる目標も、挫折しやすいんじゃないですか？」

「わかったわよ。だったら、早慶あたりにしておくわ」

「それが良いです。僕も狙ってますから」

「あんたなら、行けるよ。私も行くけどね」

二人は、薄暗い住宅街の中を、軽快な声を上げながら進んだ。彼らの声は、静かな住宅街に響き、時折、駅の方から電車の走る音が聞こえてきてそれに重なった。

図書館の中は、涼しかった。涼しすぎると思えるほどに、クーラーが効いていた。寒い寒い、と可南子が零すので、秀行は貸し出しカウンターの中年の女性へ、室内の温度を上げてもらえように頼んだが、それで承諾してもらったはいいいものの、あまり大差がなかった。

可南子の「寒い」節は、延々と続きそうなので、秀行は自分の羽織っていたブレザーを彼女の肩にかけてあげた。すると、可南子は、がたがたと体を震わせながら、それに袖を通して、ありがとうでも言うように頷いた。

彼は、席を離れた。秀行達の確保した席は、一階の奥の、ビデオの貸し出しカウンターを横切り、ビデオの視聴ブースの前に置いてある、二つの長机のうちの、片方の席だった。その机のさらに奥に、トイレがあった。

秀行は、ブースの席に座ってヘッドホンに耳を当て、ディスプレイを見つめている白髪の男性を、通り過ぎ様にちらりと見た。彼も、こちらに気付き、目が合った。

秀行は視線を彼から外し、貸し出しカウンターの横を通り過ぎ、一階の中央へと出た。そして、図書館の入り口側に立ち並んでいる専門書のある棚の方へと、歩き出した。

その棚のうちの、歴史のコーナーの前で、秀行は足を止めた。そこには、既に目を通した本が、ずらりと立ち並び、秀行はその背表紙を目で追って確認してから、まだ読んだことのないタイトルの本を手に取った。

その場で本を開いて、読んでいると、突然、視界の隅に、誰かの影が入ってきた。その影が、秀行の開いた本を、横から覗き込んでじっと見ているのに気付く。

秀行は横へ顔を向けた。可南子だった。

可南子は、秀行のブレザーを肩にかけたまま、それを両手で胸の前へ引き寄せ、本を覗き込んでいた。

「こんなの読んでるの？ 勉強やりに図書館来た訳じゃないのね」

「いや、勉強しに来たんだよ。興味がある分野の勉強を、たまにやると気分転換になるからさ。予備校のない日は、図書館来て、自分の好きな勉強をやってる」

「根っからのガリ勉ね、あんた」

「性にあってるんだよ、勉強が」

可南子は本をじっと覗き込んで、その文を数行読んでいたようだったが、ふと眉をしかめて、なんじゃこりゃ、とつぶやき、顔を本から離れた。

「私、あんたのノート、ちょっと見させてもらったけど、何、あれ。暗号か何か？」

可南子は本棚へ身を寄せて、そう言いながら、耳元に手を当て、髪を掬った。

「ああ、あれね。自分にしかわからないような書き方してるからしようがない」

「ねえ」

可南子は、突然、秀行の手の上で開かれていた本を、そっと閉じて、それを自分の腕に抱えた。

「勉強教えてよ。わからないところあるからさ。……これが読みたのなら、別に良いけどさ」

「わかった。それは借りていって、家で読むことにする」

秀行は本を指で差し、彼女がそれを差し出すと、受け取って脇に抱えた。二人は並んで歩き出す。

そして、元の席へ戻ってきた。

秀行は、本を机へ置きながら、ちらりと、先ほど目が合った、白髪の男性を振り返って見た。彼は、その視線に気付かず、口元に笑みを浮かべながら、ディスプレイを見つめている。彼は頬杖をしていた。その左の握りこぶしが、彼の白い無精ひげを撫でるように、頬に当たっている。

どうしたの、と可南子に囁かれたので、秀行はいや、と普通の大さき声でつぶやいて、視線を正面へ戻して席についた。

可南子も、秀行に向かい合うように、席につく。彼女は、両肘を机に立てて、両手を左右のうなじへ持っていていき、そこでぴたりと手を止めた。そのまま喋り出す。囁くような声で。

「まずは、国語。よろしくね」

そう言って、斜めに向けていた目を、秀行の顔へと移し、どこか大人びたような微笑みを彼女は見せた。

秀行はその微笑をじっと見た後、すぐに頷き、手を、隣の椅子の上に載った鞆の中へと滑り込ませた。その手に掴まれたのは、緑色のファイルだった。それと、筆記用具とルーズリーフを取り出した。秀行は彼女が、テストの問題でわからなかった箇所を復習したいのだろうと察して、言われる前に答案を取り出したのだった。

「察しが良いわね。私がわからなかったのは、この箇所なの」

彼女は秀行から、ルーズリーフと鉛筆を受け取ると、ルーズリーフを胸の前に置き、そして鉛筆を握り、その先で、秀行の取り出した答案用紙の一箇所を指差した。

秀行は、顔を傾けて、指差された箇所をじっと見て、ふと笑みを浮かべた。

「ここはだな、」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7842f/>

三沢高校

2011年10月5日02時50分発行